

道癌の診断はX-線検査, 内視鏡検査, 生検, 細胞診等が主たるものと考えられる。これらの検査法が食道の内腔面からの所見を得ているのに対し, ^{67}Ga -Citrate によるシンチグラフィは周囲への腫瘍の浸潤範囲, 転移の有無等を陽性に描出するので食道癌の補助診断法として利用する価値があると考えた。

〈対象と方法〉 対象は食道癌の12例であり, 他1例は術後の経過観察のみを行ったものである。これら症例に ^{67}Ga -Citrate 1.5mCi を静注し, 24~72時間後にスキャンを施行した。13例中手術を施行した8例については, 剔出標本のスキャンも行的対比した。

〈結果〉 剔出前スキャンでは12例中9例で腫瘍部位に一致してRI集積を認めた。他は疑陽性2例, 陰性1例であった。陽性例中7例では両側肺門に相当する部位にも集積を認めたが, 他の陰性ないし疑陽性例では同部位に集積を認めなかった。疑陽性例は1例が食道下部の癌で肝と重なって存在したものであり, 他は食道X-線検査上Imにあった長径5cmの陰影欠損例であった。陰性例は胃癌が食道に浸潤していた腺癌の1例であった。剔出標本のシンチグラムでは術前に陽性を示さなかった例も含めて, 全例に腫瘍部位に一致して集積を認めた。また切除胃粘膜にも一部症例で高いカウントが計測された。以上より ^{67}Ga -Citrate による食道シンチグラフィの意義は第一に腫瘍の拡がり特に食道管腔外への拡がりの診断にあり, これが手術適応の決定, 照射野の決定に役立つものとする。その他1例のみの経験からであるが特に再発の診断には価値があると思われる。一方両側肺門に相当する部位に集積を示した場合の解釈などについては今後の検討を要するものとする。

18. 肝シンチグラムからみた肝の形態の年齢的变化

湯村和子 前田 淳 相沢孝夫
井内正彦

(市立甲府病院)

市立甲府病院が過去7年間に行なった3200余例の肝シンチグラムより分析を行ない次の結論を得た。

I) 日本住血吸虫皮膚反応陽性だが, routine肝機能検査では異常を認めない群では,

①右肝ドームの挙上

この特徴は, 50歳代迄殆んど見出されないが, 60歳代において若年者と有意の頻度で出現, 70歳代では全体の10%以上にこの傾向がみられ, 特に女子にこの傾向が著明であった。5, 6年の経過を追ったものにおいては, 129例中わずか60歳代以上において女子3例にみとめられた。

②肝前額面の変化

観察開始時, 面積に対しその萎縮が10%以上のものは, 50歳代以下で全くみられないが, 60歳代で線維化したものにおいて, 6.25%みとめられた。70歳代以上では, 正常組織のもので約14.3%, 線維化したもので50%を越え約55.6%であり, 著明な肝容積の低下が認められた。

II) 上の傾向は, 従来我々が指摘し, 又最近の報告で正常老年者にみられる特徴に一致した。

III) 軽度の肝障害又は過去の日本住血吸虫症感染既応は, 5年間の longitudinal な観察では, 正常と異なる肝の萎縮がみられるのみであった。

19. $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -phytate による肝スキャンニング

久保敦司 磯部義憲 小林 剛
(慶大・放)

木下文雄 甲田英一 芝田雅義
(都大久保病院・放)

$^{99\text{m}}\text{Tc}$ -phytate は市販されている kit を利用すれば非常に簡単な調製法によって得られ, 調製直後で96.5%と高い標識率を示し, 6時間後でも92%と比較的安定していた。

静注した $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -phytate がどの程度尿, 糞便中へ排泄されるかを知るため, 肝スキャンを施行した6例について尿, 糞便中への $^{99\text{m}}\text{Tc}$ の排泄率を測定した。その結果, 24時間の尿, 糞便の測定で, 尿中へは投与量の11%が排泄され, 糞便中へは0.2%